めだかボックスのおはなし３

キイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
めだかボックスのおはなし３

【Ｎコード】
Ｎ３２５８Ｚ

【作者名】
キイナ

【あらすじ】
みんなよりおとなびたおんなのこのおはなし。

『異常だし』（前書き）

1、2とは関係ない。

『異常だし』

「……麦ー。……小麦！！」

「ん……？」

「演説、終わった」

「なんだ、不知火か……」

小麦と呼ばれた少女が眼を擦った。

「会長、なんて言ってた……？」

「なんか悩みがあったら相談しろってさ」

「ふーん……」

小麦は、チラリと向こうの方を見た。

そして。

「あの会長さぁ……。なんか弱っちいけど、大丈夫なのかな」

「あひゃひゃ！あんたからはそう見える？たいしたもんだよ！あんたホントに一年？あたしとは大違いだよ！！」

その通り、小麦はとても大人っぽく、少し金髪寄りの髪をしていることから、よく同級生に先輩と間違えられたのだ。

「そうかなぁ……。私は異常だし、普通の人とは違うしね……」

「異常、ね」

不知火はニヤリと笑うとぽん、と小麦の肩を叩いた。

背が低く、いっぱいいっぱいだったのだが。

不知火はそのまま行ってしまった。

「あぁ……。何怒ってるんだろ、不知火」

小麦は頭を書きながら、不知火が行ってしまった方向を見つめた。

『まぁね』

粉雪小麦（こなゆきこむぎ）は寝ている。

自分の席で、静かに。

「おい、小麦」

ひとりの少年が、声を掛けた。

それを聞いて、ゆっくりと顔を上げる小麦。

「善吉、善ちゃんか……」

「その名前やめてくれ……頼むから」

変な名前で呼ばれ、不愉快そうに顔をしかめる少年は、人吉善吉（ひとよしぜんきち）。

生徒会長黒神めだかの幼馴染だった。

「不知火、知らないか？」

不知火とは、不知火半袖(しらぬいはんそで)の事だ。

「私が知りたいよ……」

そう言うと、小麦はまた顔を伏せてしまった。

「なんでだ？お前も不知火になんか用があんのか？」

「まぁね」

冷たく呟いて、それ以上何も言わなくなってしまった小麦に善吉は、やれやれ、という言葉をため息と共に吐き出した。

「わかったよ……自分で探すよ！」

善吉は呆れて行ってしまった。

『愛しく』

「で、私を探してったって？」

不知火が小麦の席に手を付き尋ねた。

「んー、今日、飴、忘れっちゃってさぁ。くれないかなぁ」

不知火は、異常な程大食いだが、小麦は甘党だった。

「しょうがないな、ひとつだけだよ？」

そう言うと不知火は手に持っている袋から、『ペロペロキャンディ』を取り出した。

小麦はそれを絶望の眼差しで見つめると。

「うっわ……ありえねぇ……。そうじゃなくて、私がいっつもくわえてるのは……」

「丸いやつだろ？知ってるよ、そんなの。だぁってこれしかないんだから、我慢しな！」

小麦はそれを、しぶしぶ受取った。

一瞬の躊躇の後、口にくわえると、もごもごと喋り出した。

「私の人生は、寝る、が付き物だよねぇ……」

「知らないよ、そんなの」

小麦は一瞬だけ、愛(かな)しそうな顔をした。

「不知火を見てると、なんか、愛(かな)しくなってくるんだ……」

「へぇ、意外とロマンチックだね」

小麦はすぐ、顔を伏せてしまった。

そんな小麦を見て、不知火もまた、去ってしまった。

『世界に、生きる事に』

「ふむ、貴様が粉雪小麦か」

「なんで居るの？」

たった今、黒神めだかの存在に気付いた小麦は、微妙に引きながら、めだかに話しかけた。

「善吉と……不知火が。貴様のことをよく話しているのでな。一度、挨拶に、と」

「うわ、律義」

小麦は、今日こそ、と思い持ってきた棒付きの飴をくわえていた。

「用件はそれだけだ、それじゃあな」

「世界に、生きる事なんかに、意味は無いのさ。めだかちゃん？」

瞬間、めだかがバッ、と振り返る。

「貴様……」

「今のは忘れて……私も忘れたい事なんだ……。君は忘れられるけど、私は……」

めだかは、さっきあった出来事を、忘れてしまったかの様に、そのまま去っていった。

『特にお前は。』

「おい、めだかちゃん」

「なんだ？」

善吉の言葉に、仕事を中断し、答えるめだか。

「お前さ、小麦にあってきたんだろ？全く、本当にお前は面倒臭い事するよなぁ」

「それがどうした？」

「いや、だからよー、どうだったんだよ」

瞬間、目付きが変わった。

しかし、すぐに。

「あぁ、中々良さそうな人間ではないか。さすが善吉が目を付けただけあるな。……不知火はどうかと思うが」

「いやー！そうかそうか、不知火と違って大人っぽい気がするよな、全く」

それは唯の、雑談。

けれども、いつもとは違うのだ。

「まぁ、人は見かけで判断できねーけどな、特にお前は。小麦は中身も中々の人間だぜ」

善吉がそんな事を言うのは、珍しい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3258z/

めだかボックスのおはなし３

2012年1月14日21時45分発行